■情報学専攻修士課程研究指導者一覧

准教授　阿部　秀尚

専門領域　データマイニング、知識工学

研究内容

情報システムやロボットサービス、SNS の発展とともに、日々生成されるデータは益々増加しています。これらのデータの中から、組織活動や業務の改善に資する有用な情報を見出すデータマイニングの必要性は増大しています。

研究では、SNS などの WebAPI から得られるデータ、ロボットや各種センサから得られるマルチモーダルデータを対象に、データマイニングや知識工学的手法の適用によって、専門家との知識共創が可能な情報システムの開発を行っていきます。

准教授　池辺　正典

専門領域　Web マイニング、地域情報化、情報倫理

研究内容

インターネット上における様々な情報を収集・分析することで、新たな知見を見い出す Web マイニングという方法での研究を行います。適用分野としては、地域の自治体における情報活用の枠組みであるオープンデータや SNS におけるユーザ間のトラブルを未然に防ぐための情報倫理分野での技術活用のための研究を目指します。

教授　石井　健一

専門領域　情報行動、消費行動

研究内容

新しい情報機器やサービスが社会の中でどのように普及していくのか、どのように実際に利用されているかを研究しています。また、人々の価値観・ライフスタイルとの関係から、中国や韓国と日本の国際比較研究を含めた情報行動や消費行動の実証研究も行っています。

教授　石田　晴美

専門領域　公会計、行政評価、財務会計

研究内容

利益獲得を目的としない公的部門においても、企業と同様に限られた資源を有効、効率的、経済的に用いることは必須である。また、存続・持続可能な財政状態を維持することも重要である。会計をマネジメント・ツールとして、さらに説明責任を果たすコミュニケーション・ツールとして利活用することが求められている。公的部門にいかなる会計基準および会計処理を採用・適用することが、公的説明責任を果たし有用な意思決定に資するかを研究する。

教授　石塚　浩

専門領域　経営戦略、経営組織

研究内容

企業における社会関係資本の役割について再検討し、社会関係資本の動的な形成プロセスを考察している。今後、社会関係資本は経営戦略の実行の決め手と考えることができ、その形成には組織のあり方をどうするかが不可欠な課題となる。戦略アプローチと組織アプローチの融合を企図している。

教授　石野　正彦

専門領域　情報技術活用ビジネスモデル

研究内容

IoT システムによる経営システムの効率化や快適で安全・安心な情報社会の実現を目指して、IoT や AI、ウェアラブルセンサーなどの利活用のビジネスモデルを研究する。

講師　大橋　洸太郎

専門領域　データサイエンス、多変量解析法

研究内容

データが比較的安価に、大量に入手できる時代となりました。世の中ではデータを分析し、有用な結論を導き出すデータサイエンティストの育成が進められています。そのような中で、質的・量的調査を問わず、マーケティングにおける官能調査や社会調査データを中心に分析してきました。現在は、自由記述データを量的に分析する際に、どのような情報や指標を提示することができれば便利であるかに興味を持ち、研究しています。

教授　岡野　雅雄

専門領域　コミュニケーション論、心理言語学、記号論

研究内容

どのような「情報コンテンツ」でも、その形式と機能に着目しての分析が可能です。たとえば、記号・言語的特性に着目したり、どのような評価・印象を与えるかに焦点を当てることができます。このような観点から、記号論や言語学を基礎にしたアプローチにより、コミュニケーション効果の改善を目指した研究などの指導を行います。研究手段として、言語や記号のイメージ測定、コンピューターによる言語解析・モデル作成の方法についても、学生のテーマに応じて指導します。

講師　梶並　知記

専門領域　情報視覚化、エンタテインメントコンピューティング、e-Sports

研究内容

情報視覚化技術を基盤とした、意思決定支援システム、エンタテインメントシステムに関する研究を行っています。特に、デジタルゲーム競技（e-Sports）を対象にし、情報工学研究者の立場から、プレイヤーの意思決定支援システムや観戦支援システムの構築と評価を行い、e-Sports を情報工学研究の俎上にのせ、e-Sports の文化的価値向上を目指します。

教授　川合　康央

専門領域　情報デザイン、メディア情報学

研究内容

情報をデザインすることによって、社会の諸課題を解決するシステムやコンテンツの企画、開発、評価を行う。特に CG、CAD、GIS 等の 3 次元情報、VR、AR、MR 等の空間への展開、各種デバイスや身体センサ等を用いた入出力インタフェースを扱う。ゲームやスマートフォンアプリケーションなどの身近な情報システムから、都市、景観、災害など社会的なシミュレーションまでを対象とし、人間を中心とした魅力的なデザインについて考える。

教授　佐久間　勲

専門領域　社会心理学

研究内容

主要な研究テーマはステレオタイプです。調査および実験といった社会心理学の研究方法を用いて、ステレオタイプに関する基礎的、そして応用的研究を実施しています。基礎的な研究としては、ステレオタイプの維持・形成・変化の認知的メカニズムに関する研究を行っています。応用的研究としてはメディアがステレオタイプの形成・変化に及ぼす影響を行っています。

教授　佐野　昌己

専門領域　CG、アニメーション、データベース、協業

研究内容

情報機器の発達に伴う新しいメディアのけん引役や地域活性化の旗印としてアニメーションコンテンツに対する期待と需要は華々しいばかりです。しかし、制作の現場は華々しい印象と正反対の厳しい環境にあることも知られています。そこで、アニメーション制作を例にコンテンツ制作に有効な技術、ビジネス、国際協業などを研究します。

教授　志村　正

専門領域　管理会計、原価計算

研究内容

戦略実行のためのツールとしてのバランスト・スコアカード（BSC）をめぐる論題を中心に取り上げる。バランスト・スコアカードは、もともと、財務偏重の業績評価に対する反省として考え出された。非財務的指標とのバランスを考えた多元的な業績評価手法として考案されたものであった。近年は、さらに戦略マネジメントシステムとして、その役割が期待されている。さらに、ABC の簡略版、実用版として考案された TDABC（時間主導活動基準原価計算）の構造理解や理論的考察を通して、その意義と有用性を解明することも研究テーマとして選定できる。こうした論点を中心として議論を展開する予定である。

教授　鈴木　誠

専門領域　ファイナンス、投資、企業統治

研究内容

ファイナンスに関する理論、システム、運用手法だけでなく、投資家の投資行動についても研究対象としている。主として、コーポレートファイナンスとコーポレートガバナンスの関係についての研究と年金運用に関する研究を行っている。前者については、経営者の経営インセンティブとキャッシュフローの関係についての考察、後者はマイナス金利下における年金資産運用の実態を調査した。また、近年のマイナス金利により銀行経営が困難さを増しており、信金・信組の経営環境についての研究も行う予定である。

教授　関　哲朗

専門領域　プロジェクトマネジメント、ソフトウエア開発管理、品質マネジメント、信頼性データ解析

研究内容

情報システムの不具合に起因する事故が広範に影響する重大な問題となっています。プロジェクトマネジメント（PM）は、このような問題の解決法の 1 つとして注目を集めています。種々の開発現場への PM 適用や関連する新規手法の提案、従来から研究がなされている品質マネジメントや信頼性データ解析等の考え方のプロジェクト成功の場への導入など、総合的な考察による開発現場の問題解決手法の提案を目指します。

教授　竹林　紀雄

専門領域　映像メディア、放送、映像表現

研究内容

4K、8K といった超高精細映像の環境整備が進行しています。メディア環境ににおいて、作品ジャンルを問わず映像表現の可能性を分析し、超高精細映像が可能にする新たな映像表現の可能性を探る研究に取り組みます。また、映像作品の制作に取り組むことで、次世代の高画質技術として注目されている HDR（High Dynamic Range）等を活用し、新たに生み出されるであろう映像表現を展望します。

准教授　西尾　好司

専門領域　技術経営　知識創造　イノベーション

研究内容

企業が新しい知識を生み出すための協働のメカニズムやプロセスを対象とした研究を行う。企業による製品やサービスの開発において、顧客や大学、行政、個人など文化や意思決定の仕組みが異なる組織や人との間の協働の事例を長期的に追跡し、事例研究を通じて、企業戦略やリーダーの行動、リーダーシップ、参加者間の相互作用などに着目して、協働が機能するための要件や、どのように新たな知識を創造する場を生み出していくかを研究する。

教授　根本　俊男

専門領域　数理的問題解決法とその応用

研究内容

社会における様々な課題を素材にし、問題発見から数理モデル化、解決案のより効率の良い導出方法、問題解決に向けての意思決定の支援手法の提案などの研究活動を展開する。その際に『最適』が鍵になることがあるが、この鍵を有効に扱う手法やその応用に関する独創的なアイディアを特に意識し議論する。

准教授　日吉　昭彦

専門領域　マス・コミュニケーション論、メディア社会学

研究内容

実証的な社会調査の方法を用いて、マス・コミュニケーション論、メディア及びメディア文化論、社会調査論の領域における研究を行っております。専門はメディアの「内容分析」の方法論の探求です。内容分析とは、マス・コミュニケーション研究における代表的な実証的方法の一つで、メディア・メッセージを統計調査にもとづいて科学的に研究するために用いる技法です。

教授　藤掛　正邦

専門領域　デザイン発想、広告デザイン、編集デザイン

研究内容

「デザイン発想」を鍛える。1「広告デザイン」はコピーと写真・イラストで構成されている。コピーライターとアートディレクターでアイデアを出す。広告の基本は、ワンビジュアルとワンコピー。2「編集デザイン」文字を読ませる設計が重要。いずれも、人を振り向かせメッセージを伝えるのが腕の見せ所。ビジュアルで、コピーで、一瞬に見る人の心をとらえなければならない。

准教授　松本　修一

専門領域　交通計画、高度道路交通システム

研究内容

地域と交通の課題に情報システムや人間工学を組み合わせた交通システムに資する研究を行っています。地域には、それぞれの特性や社会システムとしてのハード的要素と共に、人間的要素、ソフト的要素が含まれるものであり、このようなアプローチでの研究活動は今後重要になってきます。上記のような問題意識のもと、主に以下のようなテーマに取り組んでいます。

1. 人に優しい移動空間の創造
2. サステイナブルな社会に向けた交通システムの施策評価

准教授　武藤　剛

専門領域　ヒューマンインタフェース、福祉工学

研究内容

発達心理学やリハビリテーション科学の領域では、人間の新たな機能獲得（学習やリハビリ、発達など）には、模倣運動のような、身体動作を介した外部環境（他者）との適切なインタラクションや、コミュニケーションが必要であることが示唆されています。しかし、このような機能獲得を支援する技術の研究は、コミュニケーション支援やインタラクション支援といった人と人の関わりを支援する技術の研究とは異なる枠組みとして進められております。私は、双方を包括する研究の枠組み、すなわち、人と人の関わりを支援することを通して人間の機能獲得を支援するための技術の設計論に関する研究を行っております。

■情報学専攻修士課程授業科目の概要

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
情報基礎特論	大橋　洸太郎	本講義は、情報社会において重要となってきているデータサイエンス分野において、ソフトウェアによる分析を行うための技術を学ぶ。具体的には、統計学に関する基礎的な内容からよく用いられる多変量解析の方法までを一通り学習し、基本知識に加えて実践的な分析能力を身につけることを目的とする。取り扱うデータは、分析結果を国家規模に一般化して統計的な推測を行うことができるレベルの社会調査データを扱う予定である。
情報コンテンツ特論	川合　康央	本演習では情報表現について学ぶ。情報表現とは、人とモノ・環境の間にある膨大な量のさまざまな情報を収集・分析し、わかりやすいカタチにデザインして受け手に的確に伝達する手段である。情報を目的や対象者に応じてどのようにデザインすればよいのかを、演習を通じて身に着け、また、情報が正しく伝達できたかを評価・測定することによって、情報表現の改善を計っていく。これらの情報表現は感性で行うのではなく、情報の構造化とその視覚化によって、さまざまなアイデアを具体的なカタチにしていくものである。これらの思考方法は、研究を進める際の問題点の整理、データの分析や結果の伝達に寄与するものである。
経営情報特論	石野　正彦	現代企業は、グローバル化と技術革新によりリスクの大きい経営環境下での事業展開を求められている。そのような環境において持続可能な経営を実践するには、経営を情報システムととらえ、情報技術と通信技術を活用した高度な管理技術が必要となる。本講義では、経営情報システムの視点から、IoTシステムによるビジネスモデルや経営システムの効率化について理解する。
情報システム特論	阿部　秀尚	現在、身の回りで欠かせない存在となっている情報システムは、種々の業務タスクを支援するため、コンピューターシステムを中心に現場の運用や対象領域の規制に合わせ開発される。そのため、情報システム開発者は、人と情報システムのあり方について、より客観的な事実をとらえ、より良いものづくりをマネジメントしていく必要がある。そこで、本講義では、科学的なマネジメントシステムの根幹であるデータの収集について、業務タスクの分析と併せて論考する。その上で、データの分析に基づいて情報システムを開発・運用し、業務タスクをより的確に支援する方法論について、実践を踏まえた授業を行う。
社会システム特論	松本　修一	近年、様々な社会システムが開発・導入され、私達の生活を支える上で重要な存在となっている。このようなシステムを構築する上で、技術革新に伴うシステム要件の変更などを考慮した設計が不可欠となってきている。本講義では、私達の生活を支える様々な社会システムの中から特に社会基盤や運輸・交通分野に関するシステムの設計・構築のための基礎や典型的な方法論、モデリングおよびデータ解析手法などについて講義を行い、その考え方および技術を習得する。
社会調査特論	佐久間　勲	人々の意識や行動の実態を捉える方法に社会調査がある。内閣の支持率を調べる世論調査や、消費者のニーズや行動を把握するマーケティング・リサーチは社会調査の典型例になる。本講義は、こうした社会調査に関する概説と演習を行う。具体的には、社会調査の基礎、社会調査の計画、社会調査の実施、データの分析、論文の執筆などについて講義と演習を通して学習する。そして修士論文を執筆するために必要な社会調査の知識とスキルを得ることを目標とする。
質的調査特論	日吉　昭彦	質的調査研究のための各種方法論を学ぶとともに、実践的なメディアの内容分析法に関する演習を通じて、質的研究の方法及び調査技術を広く身に付けることを目的とする。授業では、まず社会学的方法としての質的調査に関する方法論とその展開について学び、フィールドワークを用いた調査研究の学術的な意義やエスノメソドロジーの方法への展開など、多様な調査研究の方法について理解を目指す。 また、メディアの内容分析の手法を学び、実際に質的調査を行う演習を通じて、質的データの収集過程および整理、分析、報告までの総過程を体験して、調査方法と技術を実践的に身に付ける。
情報数理特論	根本　俊男	社会の様々な場面で取り組むべき問題が散在し、それらの問題に主体的に取り組む問題解決力を有す人材が社会から求められている。その問題解決に取り組む際には、問題を的確に捉えてうまく表現し、情報数理的な構造を明らかにして活用することが有効なアイディアとなることが多い。ここでは、社会で生じる様々な問題に対する数理的な捉え方や表現の仕方、そして問題が有する情報構造を問題解決に活用する技法を学ぶ。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
情報視覚化特論	梶並　知記	情報視覚化技術は、計算機の力を借りることで、大量の情報を人間にわかりやすく提示する技術である。本講義では、視覚化する対象となるデータの構造に応じた情報視覚化手法について理解することと、情報視覚化技術を応用した情報システムの設計論について理解することを目指す。具体的には、配列系、領域系、連結系の３タイプのデータに対するプリミティブな視覚化手法について学んだのち、近年の研究事例を対象に、情報視覚化技術を応用する際の考え方を、輪講形式で学ぶ。
情報学研究演習	川島　多加子	この授業では、アカデミック・ライティングの基礎的なスキルを習得します。 具体的には英語と日本語の論理構成を理解し、アカデミックな内容に関して英語又は日本語でエッセイ／小論文を書くことができるように学習します。書く題材として、生活、社会、価値観、時事問題等から、テーマが与えられ、英語又は日本語で関連記事を読み、説明文、意見文を、複数回書き直し、最終稿を完成させます。また、文章を書く上で必要となる正確な文法力と豊富な語彙力を高めることにも同時に取り組みます。書くために必要な情報インプットとしてのリーディング、ディスカッションを授業に盛り込み、書くことにより考える力も鍛えます。個々の学生のニーズに合わせ指導します。
グラフックデザイン特論	藤掛　正邦	本講座は、グラフィックデザインを学ぶ。図形、タイポグラフィ、レイアウトに関する演習と理論を基本軸として、グラフィックデザインの働きの可能性について実践的に探る。グラフィックデザイン学に関する基礎から応用への橋渡しとなるような知識・制作技術の定着を目標とする。
ウェブ・コンテンツ特論	池辺　正典	本講義では、Webコンテンツの企画・設計・実装・運用・管理に至る各種のフェーズを取り上げ演習形式でコンテンツの制作を行う。最初に、企画フェーズでは、ユーザ層の設定や競合コンテンツの調査などをテーマとする。次に、設計フェーズでは、サイト構造の設計やUI設計、コスト算出と収益予測をテーマとする。そして、実装フェーズでは、プログラミングだけではなく、スケジュール管理やプロジェクト管理、検証作業や版管理などシステムの実装に必要となる内容をテーマとする。最後に、運用・管理フェーズでは、システム運用後のWebコンテンツの評価・改善やSEOによるユーザーの誘引についての演習を行う。
映像メディア特論	竹林　紀雄	映像は20世紀を通して唯一かつ最大の表象メディアとして存在し続け、時代の様々な様相を映し出してきた。同時に映像による表現は様々な形態に派生した。本講義では、ドラマ、ドキュメンタリー、さらにメディアアートなどアートしての映像まで、コンテンツのジャンルにとらわれず、そしてメディアもテレビ、映画といった既存のものに限らず、映像メディア全般の可能性を探る。19世紀の映像前史から現代の映像作品までを扱うが、受講生の志向に沿い、様々なトピックス、作家、主題、技術などでテーマを設けて講義をすすめていく。
ヒューマンインタフェース特論	武藤　　剛	日本語内容：本講義では、ヒューマンインタフェース（HI）に関する最新の研究報告を題材とし、その基盤技術を習得することを目指す。特に、コミュニケーション支援技術、脳計測、生理計測、福祉工学、身体的インタラクション技術、人工知能・機械学習、ビッグデータといったHIに関する最新のトピックを中心とした学習を輪講形式で進める。
コンテンツ評価特論	岡野　雅雄	あるコンテンツが実際に受け手にどのような影響を与えているのかを捉えることは、コミュニケーション効果を改善し、新しいコンテンツの企画をサポートするために、有用である。そこで、この科目では、コンテンツ評価の方法について理解を深め、また、その効果的な応用を目指した演習を行う。具体的には、コンテンツは何を訴求しているのかという「訴求内容分析」と受け手がどのような評価・印象を抱くのかという「受容内容分析」の2つの面や、コンテンツの印象評価の測定方法などについて代表的な研究方法を概観し、さらに、さまざまな分析事例について演習形式で検討してゆく。

夢があれば、追いかけてほしい

私は現在、大学院で『企業組織内SNS』についての研究をしています。大学卒業後、上海で2年間ほど仕事をし、企業内公式アカウント・組織内SNSの仕事に携わってきました。その中でさらに研究を深めたいと考え、辞職して日本へ留学しました。渡日後、文教大学外国人留学生別科で一年半間勉強し、情報学部で半年間研究生として専門知識勉強したのちに、大学院へ進学しました。企業内情報を社員に伝達する時、社員間で交流する時、企業組織内SNSが最も役に立つと思います。私はこの分野の知識をさらに深めて発展させていきたいと考えています。現在、私の大学院の生活は始まったばかりで、これから、様々なことにチャレンジをしていきます。皆さんも、やりたいことがあれば、是非迷わずに挑戦してください。未来の自分を後悔させないでほしいと思います。

情報学研究科　情報学専攻修士課程２年
馬（マ）　嬌嬌（キョウキョウ）さん

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
コンテンツ企画特論	佐野　昌己	世界のコンテンツ市場は巨大であり、さらに将来において成長が見込まれる数少ない分野であることから、コンテンツ産業の育成を国家戦略と位置付けている国も多い。ところが、市場が巨大なことからハイリスクハイリターンな投資となる状況も起きている。そのため、コンテンツ制作においては企画段階における熟考と戦略立案が重要となるのである。そこで本講義では、映画およびアニメーションを主な対象として、企画の前段階となる、分析法を既存コンテンツの分析の実践を通して学ぶ。そのうえで、コンテンツ市場における成功を目的とした戦略企画立案について議論を行う。
消費者行動特論	石井　健一	国際的にマーケティングを展開するためには、文化が消費行動にどのような影響を与えているのかを理解することが必要である。この授業では文化が消費者行動に対してどのような影響を与えているのかを分析した消費者行動の研究を取り上げる。理論的な枠組みやデータの分析方法について講義をする一方で、学生は具体的な分析例の論文（日本語または英語）を読み、発表をしてもらう。
経営戦略特論	石塚　　浩	前半は経営戦略の標準的な図書を読むかたちで進める。そのなかで企業の競争優位を説明する上で競争戦略モデルと資源依存モデルの統合が必要になることを理解してもらう。後半は企業経営の実際例を分析し、経営戦略理論を応用するなかで理解を深めていく。具体的な企業の戦略行動の基礎にあるロジックを探るなかで、企業行動の成功や失敗を考える。各事例における多様な経営上の問題とその解決策をみることで、戦略的思考力の修得を図る。経営学分野を専門としない学生にも、十分に理解できるような講義をめざす。
情報化戦略特論	西尾　好司	企業の情報戦略の中から、デジタルディスラプションやデジタルトランスフォーメーションといわれる最近のデジタル化の動向や影響、具体的な国内外企業のデジタル化戦略に焦点を当てる。ビジネスモデルの変化（製造業やサービス業の変化）、プラットフォームやエコシステムの構築、新製品やサービスの開発の変化などを取り上げ、ケースに基づいて、企業戦略の動向や関係する経営学の理論、研究の動向を学ぶ。
プロジェクトマネジメント特論	関　　哲朗	情報社会の到来は、企業や個人の欲求を大きく変化させている。この変化は、企業の諸活動に明確な目的、目標の存在を求め、また、従来とは比べようもないスピードとコスト意識をビジネスの成功要因とするに至っている。プロジェクトマネジメントは、この様な変化を受け入れた現代社会の問題解決ツールである。本講義では、モダン・プロジェクトマネジメントの基礎と適用場面を概観するとともに、プログラムマネジメントやプロジェクト・ポートフォリオマネジメントといった、プロジェクトマネジメントの周辺知識についても概観することで、21世紀社会の新しいモノづくりパラダイムのあり方について考察を深めていく。
管理会計情報特論	志村　　正	管理会計情報の戦略的問題とその利用について討議することが本講義の目的である。具体的な内容としては、ABC（活動基準原価計算）による製品関連意思決定、TDABCとABCとの比較、ABM（活動基準原価管理）およびABB（活動基準予算管理）の理論的・実践的研究、BSC（バランスト・スコアカード）の戦略的活用、原価企画をめぐる戦略的原価管理、予算と戦略、そして管理会計情報の戦略的分析である。これらを含む管理会計の論題を調査しプレゼンテーションを行ってもらう。

授業科目の名称	担当者	授業科目設定のねらいと概要
財務会計情報特論	石田　晴美	現在わが国の会計基準は、①日本基準、②修正国際基準（JMIS）、③米国基準、④ピュアIFRSの4基準が併存している。何故このような状況になったのか。ここに至るまでの経緯と背景、さらに日本基準とIFRSの最も大きな差異とその影響を理解し、今後わが国が目指すべき会計の在り方を考察する。また、近年企業の公表が活発化してきた統合報告とは何かを考えながら、財務会計の役割とその限界を検討する。さらに、公表財務諸表から企業業績を読み取る力を醸成する。
ファイナンス特論	鈴木　　誠	ファイナンスは数理経済学やミクロ経済学と近接した分野である。ファイナンス特論では、一般的なファイナンス理論の中でも特にデリバティブズの価格決定理論にの基礎を学ぶ。数学的な記述が一般的であるので数学的なバックグラウンドが無い学生には、微分や積分の初歩から確率微分方程式の利用までしっかりしたトレーニングを行う。そのための参考図書としてはSalih N. Neftciの「AnIntroduction to the Mathematics of Financial Derivatives」を挙げておく。